

五柳叢書  
最新刊

おもしろければ  
OKか?  
現代演劇考  
三浦 基

誰か、誰かいないか。……  
客がいる。観客に語れ。  
関われ。無理にでも関われ。  
演劇の真実を再生、更新するための作戦、  
まるごと大公開。

定価 2100円

好評発売中

ブルースト逍遙  
世界文学シュンボンシオン

室井光広  
世界文学史上に凜然と輝く  
「失われた時を求めて」。  
著者は、三種の翻訳を行きつ戻りつ  
しつつ、セルバンテス、ドストエフ  
スキー、カフカ、キルケゴール、  
ベンヤミン等を誘い込み、  
夢の実現にまつわる呪文の解説を  
めざす。

定価 2940円

絵画の近代の  
始まり

カラヴァッジオ、フェルメール、ゴッ  
千葉成夫  
中世と近代のはざまに  
人間を誕生させたカラヴァッジオ、  
描写技術で視覚に魅惑をせまる  
フェルメール、  
戦争と内乱の最中、感覚で人間の  
向こう側に触れるゴッヤ、  
3人の画家の作品を通して  
現代の絵画の源流を探る。

定価 2310円

五柳書院  
東京都千代田区猿樂町1-5-1601  
Tel.03-3295-3236  
Fax.03-3295-6065

は、ゲーウィンの先進性をよく表わしている。索引のないのが惜しい。

2 日本におけるゲーウィン研究の第一人者が発表した伝記の決定版とも言えるもの。多数出ている伝記の中でも出色の内容だろう。本書を英語訳して、日本語を解さない人々にも読んでもらったらよいのではないかと思っ

3 刊行された時に買っておいただが、二〇〇九年の二月にインドに一週間ほど滞在した際、現地でも読むことができた。本書は十七世紀当時のフランスでもっとも読まれた書のひとつだったそう。それにしても、アウラングゼーブがああ程度の賢さで父シャール・ジャハンのあとに帝王の座につけたことを思うと、独裁制・世襲制がいかに悪い制度であるかがわかってくる。彼は長生きしたが、その後ムガル帝国はどんどん下り坂にな

るのだから。

4 膨大な時代物の著作がある佐伯氏のシリーズは、実際の歴史に登場した人物を織り交ぜながら、濠洲一族の首領総兵衛を中心とした大絵巻きであり、最後まで興味つきがない。剣と剣のぶつかりあいのときの間合いがしっかりと書いてあるなど、情景を目に浮かべやすくなっている。このシリーズも映像化したらおもしろいだろう。最後にベトナムまで広がってゆく一族の夢は、神君家康と言いつつ、実は徳川幕府の領国政策への批判ともなっている。スペインを初めとした地球をまたにかける小説が原点である作家らしい視点だろう。

5 何度読み返しても楽しい作品。クラシック音楽を扱った本シリーズは、今後数十年先にも読み継がれてゆくことだろう。

村田 宏 (美術史)

1 谷川渥「シュルレアリスムのアメリカ」(みすず書房、二〇〇九年二月)  
「シュルレアリスム」と「アメリカ」という、魅力的な、しかし(明快な歴史的展望と該博な学識を必要とする点で)きわめて困難な主題にとり組みつつ、見事な成果をおさめた著作である。谷川氏も述べるように、これまでの著書のなかでは「珍しく」「実証的」な記述の多い、その意味で「美術史研究」の色合いが濃厚であるが、それだけに歴史考証の面白さが随所に窺える秀逸な論考となっている。時代の鼓動がたしかに聞こえる、といえはよいだろうか。叙述の基軸に「アルトンvsグリーンバーグ」を据えた着想も卓抜である。シュルレアリスムやアメリカに少なからぬ関心を払ってきた評者にとって、まさに

3 草森紳一「中国文化大革命の大宣伝」上・下(芸術新聞社、二〇〇九年)  
「絶対の宣伝 ナチス・プロバガンダ」全四巻を著し、中国古典の詞藻に明るい草森紳一が、文革の解析に挑んだ大著。壁新聞の片言や「人民日報」の写真一枚が、扇動を意図して周到に打たれた布石であったことを、膨大な証拠で解き明かしてゆく。込められた寓意を察して素早く身を躲さねば命を落とすことになるこの野蛮な道化芝居の鍵は、ただ一人毛沢東が握っていたわけだから、本書は「プロバガンダティスト毛沢東」論でもある。四旧打破を掲げて人民には焚書させておきな

がら、自身の書齋は汗牛充棟の毛沢東。独裁者にして現代中国屈指の詩人が、その魔術的な言語能力を武器に仕掛けた政争の凄まじさたるや!

4 岡井隆(聞き手・小高賢)『私の戦後短歌史』(角川書店、二〇〇九年)  
心憎いまで滔々と語られる文学的営為。正統「アララギ」の嫡子と見なされていたのに、風雲児ながら革命と前衛に引き寄せられ、都落ちもあれば返り咲きもあり、非難轟々のなか歌会始の選者に就いてのち現在に至るまでの来し方が、縦横に回顧されている。「本来僕が標準なんで(笑)」という一言にも、千年を超す本邦詩歌の歴史を掌握しているという自信が感じられて、素寒貧の読者としてはゴマメの齒軋りに白歯が磨り減りそう。『現在、現代詩が衰弱してきているとしきりに言われているでしょう。……文語の中に含まれている滋養分というのを十分利用すればあるいは別の道が生まれたか』と耳の痛い指摘も。

5 岡田茉莉子「女優 岡田茉莉子」(文藝春秋、二〇〇九年)  
「岡田茉莉子が岡田茉莉子を演じる」ことをプリンシプルとし、映画女優ひとすじに歩んできた半生を顧みる自伝。たとえば吉田喜重監督の傑作『戒厳令』では、岡田茉莉子は出演せずプロデュースに回っている。「三國

連太郎演じる北一輝の)妻の役については、私が演じるかどうか、その判断は私に任せると、吉田は言っていたが、私は迷った。……その役を、女優としては演じることができて、映画スターとしての私のイメージを観客が捨てられるとは思えなかった。観客がスクリーンに岡田茉莉子自身を見てよい役かどうかを熟考し、否となればプロデューサーを務めて映画を支える情熱こそ、大女優の真骨頂だ。

斎藤成也 (人類学)

1 ゲーウィン著、渡辺政隆訳『種の起源(上下)』光文社古典新訳文庫、二〇〇九年  
2 松永俊男『チャールズ・ゲーウィンの生涯』朝日選書、二〇〇九年  
3 ベルニエ著、関美奈子・倉田信子訳『ムガル帝国誌(一・二)』岩波文庫、二〇〇九年  
4 佐伯泰英「新装版 古着屋総兵衛影始末(全11巻)」徳間文庫、二〇〇八年  
5 二ノ宮知子『のだめカンタービレ(全23巻)』講談社、二〇〇二年(二〇〇九年)

1 西暦二〇〇九年はチャールズ・ゲーウィン生誕二〇〇周年だった。それを記念した新訳が登場した。一五〇年前に発表された原書だが、渡辺氏の名訳による読みやすい内容